小学生高学年の部

特選

命をつなぐ水

東松島市立矢本西小学校　６年　尾形　柑南

「ウォーターエイドという活動を知っていますか。」

これまで気にも留めなかった「水」に関心を持ったきっかけは校長先生の言葉だった。

ウォーターエイドとは、安全な水やトイレなどがない国に、それを利用できるように支援する活動だということ。それは、私たちの暮らす東松島市が重点的に取り組んでいる「SDGｓ」の目標の１つとなっているということだった。世界では、この活動に３４ヵ国が加入し、２０１９年には、約１，６００万人に安全な水を、約２２３万人に清潔なトイレを届けている。校長先生の提案は、児童会から全校児童に向けて安全な水を使えない人たちがいることを伝えたり、募金を呼びかけたりすることについてだった。

両親にウォーターエイドについて話すと、

「覚えていないかもしれないけれど、柑南が小さいころには、安全な水を手に入れられない時があったんだよ。」

と話してくれた。東松島市は沿岸部に位置し、震災の被害が非常に大きかった地域である。震災を受け１週間以上も断水が続いた。水道が復旧しても鉄や泥の混じった水が出てきたが、日を追うごとに手を洗ったり、掃除をしたりすることができるようになった。そんな当たり前の日常を取り戻せることが、両親は涙が出るほどにうれしかったという。その時に「人が生きるために水はなくてはならないかけがえのない存在」と気付いたことを教えてくれた。当時のつらく厳しい生活について思い出しながら話してくれた両親の姿に、自分の手で安全な水を手に入れることがどれほど難しいことなのか確かめたいと感じた。

そこで私は、自らの手で汚れた水をろ過して、きれいな水にするろ過機を作ってみようと思った。材料になる石や砂は、市内の海や山で収集し、装置を組み立てるのも何度も失敗した。ろ過する汚れた水が自分の体に入ることを想像すると、一つ一つの手順に妥協が出来なかった。透き通った水が出てくるまで私はただ黙々と繰り返しろ過を続けた。作業を続ける私の頭の中をよぎったのは、名も知らない国で、何度も何度も必死にろ過した水を飲んだり、泥が混ざって濁ったままの水を飲んだりする沢山の人の姿だった。自分と同じくらいの年齢の子どもたちがそんな生活を強いられていることを想像すると、胸が締め付けられるように切なくなった。

ろ過作業には想像以上に時間がかかり、３時間たっても１日に必要な１人分の量の半分も取れなかった。自作したろ過機の前で自分の無力さを痛感しながらも、東日本大震災当時の家族のつらさや、遠い異国で不自由な生活を送る子どもたちの思いに今までよりも少しだけ近づくことができたような気がした。

日本で水道が普及する以前には、水を得るための手段として「井戸」が使われていた。かつて日本に暮らす人々にとって、井戸とは「命をつなぐ水」を得る神聖な場所であり、沢山の人々の思いが集まる井戸には「神」が宿ると信じられていた。両親の話では震災直後にも、地域に点在する井戸が生活用水を得るために水道の代わりとして使用され、多くの人々の生活と命を支えていたという。井戸は人々に大切にされ、埋められる際には粗末に扱うことで災いが起こらぬよう「感謝」の思いを込めておはらいがされてきたそうだ。今を生きる私たちは、当たり前のように絶えず流れ出ている「命をつなぐ水道」へ、井戸と共に生きてきた人々と同じ思いを抱くことができているだろうか・・・。

これまでの私は、水は蛇口をひねればいくらでも出続けてくるものだと考え、水を出したままにすることも少なくなかった。しかし、ウォーターエイドという活動を知り、両親から震災当時の生活を聞いて、ろ過機を作成し、「水」は生きるために必要不可欠な〝かけがえのない資源〟であることを知った。

ウォーターエイドへの活動は、これまでの私のような思いをもっている全校の児童に、水の大切さについて伝え、気付いてもらうことのできる大切な機会だと思う。清らかで安全な水が飲める私たちの「当たり前の生活の幸せ」が他の国でも当たり前だと思えるように。幸せを世界中で平等に分かち合える時が少しでも早く迎えられるように。私たちはウォーターエイドの活動に取り組んでいきたい。